

看護学生と他分野学生の死のイメージに関する調査研究

— 調査項目の所属間の比較による検討 —

呉大学看護学部

一色 康子

大阪市立看護専門学校

河野 政子

■ はじめに

死に出会うということは、それを通していかに生きるかを自覚することにつながる。しかし現代社会におけるライフスタイルの変化に伴い、若年者が厳粛な死の瞬間に直面する機会は少なくなった。その反面、バーチャル・リアリティー・ゲームなどにより、容易に間接的に死を体験できるようになり、若年者の死に対する考え方も変化してきている。そこで今回、看護学生と他分野学生を対象に、死に関するイメージについてアンケート調査を行うことにより、1) 現代若年者の死に対する考え方の特徴を知る、2) 両者を比較することにより、看護教育に求められる物は何かについて考える資料とするため、その結果を検討した。

■ 研究方法

1998年9月から12月にかけて、大阪府下の看護婦養成所4校、看護短期大学1校の学生（看護学生と称する）と一般大学6校、短期大学2校の文科系学部、学科に所属する学生（他分野学生と称する。内訳は大学は文学部、教育学部、経済学部、社会学部、生活科学部、短期大学は幼児教育学科、家政国際教養学科の5学部2学科である）を対象に集合調査を実施した。調査方法は、研究協力者の講義に出席した学生に、講義開始前あるいは終了後、研究の趣旨を説明し協力を得られた者に質問紙を配布し、その場で回収（一部留め置き）する方法をとった。その結果、看護学生830名、他分野学生1,011名から質問紙を回収した（回収率

98%、無記名回答）。分析には他分野学生のうち、所属を大学院と記入した10名を除く1,831名を対象とした。

調査内容は1) 基本属性（性別、生年月日、所属）、2) 死に関わった経験、3) 死に対する恐怖感、4) 死への関心、5) 病名告知への希望、6) 死に場所の選択、7) 宗教への関心、8) 死をイメージする病名とその理由についての項目を盛り込んだ。この他、看護学生に対しては急性期、終末期・予後不良患者の看護の講義と実習の履修状況を設問として加えた。分析方法として、統計プログラムSPSS9.0J for Windowsを使用し、有意差検定にはMann-Whitney U検定、 χ^2 検定を実施した。質問項目の完全回答がなされていないサンプルがあるため、分析により、データ数が異なる場合がある。

■ 結果

本調査は大阪府下の看護学生と他分野学生に実施したものである。対象者の平均年齢は21歳、性別内訳は、看護学生は男1.5%、女98.5%、他分野学生は男22.3%、女77.7%であった。また対象者の所属は看護系専門学校45.9%、看護系短期大学1.1%、一般大学28.8%、一般短期大学24.2%であった。

本調査結果の特徴は、最近頻繁に言われている若年者の死に出会う機会の少なさを反映したものであると言えよう。父母の死を体験している者は看護学生4.0%、他分野学生3.2%、おじお婆の死を体験している者は看護学生6.9%、他分野学生

いっしき やすこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

16.1%, いとこの死を体験している者は看護学生1.9%, 他分野学生3.1%と少なく, 血縁者の中でも祖父母の死を体験している者が看護学生41.8%, 他分野学生57.0%と最も多かった(表1)。各設

表1 看護学生・他分野学生間の死に関わった経験

質問項目	看護学生(n=825)		他分野学生(n=929)		χ ² 検定
	あり	なし	あり	なし	
ペットの死を体験	60.7	39.3	44.9	55.1	**
祖父母の死を体験	41.8	58.2	57.0	43.0	*
おじ・おばの死を体験	6.9	93.1	16.1	83.9	*
親しい友人の死を体験	6.5	93.5	11.4	88.6	*
患者の死を体験	5.5	94.5	0.9	99.1	*
父母の死を体験	4.0	96.0	3.2	96.8	n.s
いとこの死を体験	1.9	98.1	3.1	96.9	n.s

表中数値は%を示す(複数回答を含む) *: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$

問に対して, <自分の死に対する恐怖感>については, 看護学生60.5%が少し怖い, とても怖いと答え, 他分野学生は68.5%が同様に答えた(表2)。また<他人の死を看取る恐怖感>については, 看護学生76.8%が少し怖い, とても怖いと答え, 他分野学生は81.9%が同様に答えた(表2)。さらに<死に関する本(専門書・宗教・哲学書も含めて)を読むか>の設問については, 看護学生37.2%, 他分野学生12.3%が時々読む, よく読むと答え, <身近な人の死について考えるか>の設問については, 看護学生18.0%, 他分野学生62.1%が時々考える, よく考えると答えた(表2)。<死について語り合うか>については, 看護学生40.8%が時々語り合う, よく語り合うと答え, 他分野学生は27.0%が同様に答え, 看護学生の方が高率であった。これらアンケート項目の所属間の比較をすると, <自分の死に対する恐怖感><他人の死を看取る恐怖感><身近な人の死について考えるか>の三項目において, 他分野学生の方が看護学生より強く(または頻度が高く)そうであることを示した(表2)。

次に看護学生について, カリキュラム履修状況別に<肉親の死を看取る恐怖感>および<他人の死を看取る恐怖感>について比較してみた。急性期患者看護の講義を未履修の者は26.5%, 履修中・履修済の者は73.5%, 終末期・予後不良患者の講義を未履修の者は36.5%, 履修中・履修済の者は63.5%, 急性期患者看護の実習を未履修の者は67.0%, 履修中・履修済の者は33.0%, 終末期・予後不良患者の実習を未履修の者は72.8%, 履修中・履修済の者は27.2%であった。

<カリキュラム履修状況別に見た看護学生の肉親の死を看取る恐怖感>を比較すると, 終末期・

表2 アンケート項目の所属間の比較

質問項目	所属		Mann-Whitney U検定	z値	p値
	看護学生(n=828)	他分野学生(n=929)			
<死に対する恐怖感> 自分の死に対する恐怖感	1 全然怖くない	3.7%	4.7%	-4.35	0.001
	2 怖くない	10.9%	7.3%		
	3 どちらともいえない	24.9%	19.5%		
	4 少し怖い	36.6%	34.9%		
	5 とても怖い	23.9%	33.6%		
他人の死を看取る恐怖感	1 全然怖くない	1.5%	2.3%	-4.92	0.001
	2 怖くない	5.8%	4.6%		
	3 どちらともいえない	15.9%	11.2%		
	4 少し怖い	37.9%	30.1%		
	5 とても怖い	38.9%	51.8%		
<死への関心> 死に関する本を読むか	1 読んだことがない	18.1%	52.0%	-15.62	0.001
	2 あまり読まない	34.8%	27.1%		
	3 どちらともいえない	9.9%	8.6%		
	4 時々読む	35.1%	11.0%		
	5 よく読む	2.1%	1.3%		
自分の死について考えるか	1 考えたことがない	3.5%	5.2%	-1.25	0.21
	2 あまり考えない	23.6%	23.7%		
	3 どちらともいえない	10.5%	13.9%		
	4 時々考える	53.6%	46.8%		
	5 よく考える	8.7%	10.4%		
身近な人の死について考えるか	1 考えたことがない	12.0%	5.4%	-5.17	0.001
	2 あまり考えない	62.6%	18.1%		
	3 どちらともいえない	7.4%	14.4%		
	4 時々考える	16.3%	52.9%		
	5 よく考える	1.7%	9.2%		
死について語り合うか	1 語り合ったことがない	3.9%	13.4%	-7.02	0.001
	2 あまり語り合わない	42.0%	43.8%		
	3 どちらともいえない	13.3%	15.8%		
	4 時々語り合う	34.9%	24.4%		
	5 よく語り合う	5.9%	2.6%		

予後不良患者看護の講義を未履修の者が, 履修中・履修済の者に比して恐怖感が強く($p=0.003$) (表3), さらに<カリキュラム履修状況別に見た看護学生の他人の死を看取る恐怖感>を比較すると, 終末期・予後不良患者看護の講義を未履修の者が, 履修中・履修済の者に比して恐怖感が強かった($p=0.002$) (表4)。

<病名告知への希望>については看護学生・他分野学生とも, 大半以上が隠すところ無く全てを知りたい, <死に場所の選択>については自宅だと答えており, <宗教への関心>については看護学生79.4%, 他分野学生は79.7%が関心はないと答えた(表5)。

表3 カリキュラム履修状況別に見た看護学生の肉親の死を看取る恐怖感の比較

履修・実習内容	看護学生		Mann-Whitney U検定	z値	p値
	未履修者(n=219)	履修中・履修済(n=603)			
急性期講義	1 全然怖くない	1.8%	2.7%	-1.503	0.133
	2 怖くない	6.9%	8.6%		
	3 どちらともいえない	12.8%	13.6%		
	4 少し怖い	23.0%	25.1%		
	5 とても怖い	55.5%	50.0%		
終末期・予後不良講義	1 全然怖くない	1.7%	2.9%	-2.948	0.003
	2 怖くない	6.3%	9.2%		
	3 どちらともいえない	11.0%	14.8%		
	4 少し怖い	23.3%	25.1%		
	5 とても怖い	57.7%	48.0%		
急性期実習	1 全然怖くない	3.1%	1.1%	-2.399	0.016
	2 怖くない	7.5%	8.9%		
	3 どちらともいえない	10.6%	19.0%		
	4 少し怖い	24.0%	25.3%		
	5 とても怖い	54.8%	45.7%		
終末期・予後不良実習	1 全然怖くない	2.9%	1.3%	-0.931	0.352
	2 怖くない	7.6%	9.4%		
	3 どちらともいえない	12.3%	16.1%		
	4 少し怖い	24.9%	23.8%		
	5 とても怖い	52.3%	49.4%		

表4 カリキュラム履修状況別に見た看護学生の他人の死を看取る恐怖感の比較

履修・実習内容	看護学生			Mann-Whitney U検定 z値	p値
	未履修者 (n=218)	履修中 (n=603)	履修済 (n=223)		
急性期講義	1 全然怖くない	1.8%	1.4%	-1.852	0.064
	2 怖くない	4.1%	6.6%		
	3 どちらとも言えない	14.7%	16.6%		
	4 少し怖い	35.8%	38.6%		
	5 とても怖い	43.6%	36.8%		
終末期 予後不良講義	1 全然怖くない	1.3%	1.4%	-3.075	0.002
	2 怖くない	3.7%	7.3%		
	3 どちらとも言えない	14.7%	16.9%		
	4 少し怖い	35.0%	39.5%		
	5 とても怖い	45.3%	34.9%		
急性期実習	1 全然怖くない	1.8%	0.7%	-1.973	0.049
	2 怖くない	6.0%	5.6%		
	3 どちらとも言えない	14.3%	19.7%		
	4 少し怖い	36.2%	40.5%		
	5 とても怖い	41.7%	33.5%		
終末期 予後不良実習	1 全然怖くない	1.7%	0.9%	-1.471	0.141
	2 怖くない	5.5%	6.7%		
	3 どちらとも言えない	14.8%	19.3%		
	4 少し怖い	37.9%	37.7%		
	5 とても怖い	40.1%	35.4%		

最後に〈死をイメージする病名〉については、大半以上が悪性新生物と答えている中で上位にエイズが位置していることも見逃せない結果である。また〈死をイメージする理由〉については、自らの体験を通じてよりもマス・メディアを通じてという回答が多かった(表5)。

表5 アンケート項目集計結果

質問項目	看護学生 (n=825)	他分野学生 (n=929)	
病名告知希望	1 隠すところなく全てを知りたい	79.4%	69.7%
	2 状態が良いなら知りたい	9.1%	15.9%
	3 知りたくない	1.2%	1.6%
	4 分からない	9.7%	12.0%
	5 その他	0.6%	0.8%
死に場所の選択	1 絶対病院で	3.5%	4.2%
	2 仕方なく病院で	6.0%	6.8%
	3 自宅で	59.0%	63.3%
	4 ホスピスで	11.8%	2.9%
	5 誰も知らないところで	6.1%	8.4%
	6 その他	13.6%	14.4%
宗教への関心	1 宗教に入信している	7.1%	7.5%
	2 入信していないが関心はある	12.7%	11.7%
	3 関心はない	79.4%	79.7%
	4 NA	0.8%	1.1%
死をイメージする病名	1 悪性新生物	84.8%	76.8%
	2 AIDS	8.7%	15.6%
	3 心疾患	1.6%	0.9%
	4 脳血管障害	0.9%	1.3%
	5 その他	4.0%	5.4%
死をイメージする理由	1 マスメディアを通して	50.4%	62.9%
	2 身近な人の死亡・闘病生活を通して	26.6%	28.8%
	3 受け持ち患者が同じ病気だから	10.7%	0.1%
	4 地域の特徴	3.9%	0.9%
	5 自分が罹患しているから	0.1%	0.2%
	6 その他	8.3%	7.1%

■ 考察

柏木¹⁾はその著書の中で『私たちは日ごろ自分の死についてあまり考えようとしな。死や死後の世界について考えることは、私たちに不安や恐れを生み出す。それに死ぬということはどういうことなのか、死んだ後はどうなるのか、などの問

題はあまりにも大きすぎて、とても太刀打ちできないように思える。そこで私たちは忙しい毎日の生活のなかに埋没して、死を考えないようにする』と述べている。ライフサイクルにおける死は人生の終焉の時期であり、死はどんな人にも同等に訪れるものである。また死について考える時には、その人自身の過去の死に遭遇した体験によって大きく左右される。その上、自分の死について考える時には、その人自身の『人生をどう生きていくのか』という信念または価値観が深く関わり、過去の体験を通して形成されてきた生命観・人間観・人生観・健康観・宗教観などにより大きく左右される。そのため日常生活の中での思考・体験が、物の見方・考え方の幅を広げ、死生観を育てることにもつながる。

關戸²⁾らは大学生の死に対するイメージについて因子分析を行った結果、『死に対する何らかの関わりや体験は、死を肯定的イメージで捉える要因となっていることが見いだされた』と述べている。最近では核家族化が進み、本調査結果の〈看護学生・他分野学生の死に関わった経験〉からもうかがえるように、身内または身近にいる親しい人の死に出会う機会が減少していることが、死という未知の物に対する恐怖感を増強させる一因子につながるものとも考えられる。これによって、大半以上の学生が自分の死に対する恐怖感および他人の死を看取る恐怖感が強いと回答したと推察できる。また〈死をイメージする病名〉の第二位にエイズが位置していること、および〈死をイメージする理由〉の第一位がマス・メディアを通じてなどにより、1) マス・メディアを通じて医療に関するトピックスが数多く報道される現代の情報化社会を反映している、2) 人間の日常的な自然の死を、アニメやドラマに現れる『劇化された造られた死の場面』と同一視する傾向などにより、死に対する恐怖感が増幅しているものとも考えられる。さらに新聞・ラジオ・テレビ等のマス・メディアを通じて報道されている医療技術の進歩による延命、それに伴う死亡判定の困難さなどは、人の死を静かに看取り、その死を悼み、悲しみ、人を失うことを淋しいと実感する人間の自然な感情を阻害する因子になるとも言える。その上、テレビ放送のインパクトは強く影響力も大きい。特に死に関わった経験が乏しい若年者にとっては、マス・メディアからの一方的な情報流入により、情報を選択・確認する間もなく圧倒されるという

現象に陥りやすい。さらにマス・メディアの普及に伴い、これらの報道に対する依存が増大するため、今回のような調査結果が得られたと考えることもできる。そのため看護教育の中でマス・メディアを導入して学習内容を構築する際には、学生が学内演習、臨地実習を通してできるだけ同じ内容を体験することができるように、意図的に内容の精選を行う必要があるのではないかと考える。

通常、死に関する本を読み、語り合うことにより、生死についての知識を獲得し、考えを深め、人それぞれの独自性を知る手がかりとすることができる。今回の調査結果からは、大半以上の学生が死に関する本（専門書・宗教・哲学書なども含めて）を読んだことがない、あまり読まないと答えており、これも死に対するイメージを形成する上で、未知の物に対する恐怖感を増強させる大きな要因になったであろう。これに反して、死に関する本を時々読む、よく読むと答えた者は看護学生37.2%、他分野学生12.3%であり、看護学生が他分野学生に比して高率であった。さらに〈死について語り合うか〉の項目についても、看護学生の方が時々語り合う、よく語り合うと答えた比率が高く、これらは看護学生が講義・実習を通して、より教科書・専門書・参考図書に触れる機会が多く、グループ・ワーク、カンファレンスなどにより、様々な死生観、多様なターミナル・ケアのあり方を知る機会に恵まれることに起因するものとも言える。

看護学生は終末期・予後不良患者の看護の講義を通してターミナル・ケアとはどうあるべきか、そして人間の死をどうとらえ、具体的にどう援助していくのかという援助方法を学ぶ。知識・技術の獲得により、不安・恐怖感は軽減するものと思われるが、これに関しては本調査においても同様の結果が得られた。これに反して、ターミナル・ケアに対する知識・技術の不足、患者の死が自分

の手に負えるものかどうか、また実際にその様な患者の本心に向かい合い、ともに死を見つめ合い、ケアしていくことができるかなどという不安を持って実習に臨む看護学生も多く、これが講義・実習を履修中・履修済の者であっても他人の死を看取る恐怖感が強いと答えた者が高率である大きな要因ではないかと考える。さらに以上のことは表3、表4の検定結果と整合性のあるものとも言える。

〈病名告知〉〈死に場所の選択〉については、個人の選択権・自己決定権を尊重する現代社会、QOLを追求する時代の流れに即した考えの現れであると思われる。

以上より、死を迎えた患者のベツトサイドでは、患者個々の独自性を尊重し、その人の人生最期の時まで患者を一人の人間として理解し続けていくことのできる看護者になれるよう、学生の死生観を育てていけるような関わり、意図的な指導が必要とされる。

■ まとめ

大阪府下の看護学生、他分野学生1,831人を対象とし、集合調査（一部留め置き調査）を実施した。本調査の結果より、1）最近の若年者が死に出会う機会の少ないこと、2）マス・メディアを通じて造られた死、ドラマ化された死を体験しており、これが自然の死と同一視されている傾向が強いことなどの特徴を得ることができた。また看護学生は、講義の中で生死について考え、実習を通して人の生死に触れる場面に遭遇するため、他分野学生に比して死に対する恐怖感は弱いという結果を得た。

看護の基本は対人関係にある。豊かな感性で育まれた死生観は、豊かな看護を創造する。そのため、学生の死生観を育てるような関わり、意図的な指導等が必要とされる。

引用文献

- 1) 柏木哲夫：生と死を支えるーホスピスケアの実践ー。朝日選書341：p.23, 1992.
- 2) 關戸啓子、菊井和子他：死に対するイメージとその形成に影響を与える要因の検討。第26回日本看護協会学会集録（看護総合）：20-22, 1995.

参考文献

- 1) アルフォンス・デーケン編：死の準備教育。第一巻。死を教える。メヂカルフレンド社、1986.

- 2) 菊池登喜子, 小代聖香他: 死のイメージとその関連要因についての因子分析. 看護展望11: 594-604, 1986.
- 3) 中村悦子: '死への看護' の体験をワークショップの中で討議・検討させて. 看護教育22: 839-844, 1981.
- 4) 中山利子, 柳川育子, 谷口尚樹: 看護学生の死生意識と終末期実習に関する一考察. 京都市立看護短期大学紀要・第18号: 117-122, 1992.
- 5) 野村和子, 森川安子: 死への意識調査. 藍野学院紀要・第6号: 39-48, 1992.
- 6) 渡辺美千代: 看護学生における死生観の形成過程を考察するー3年間の過程を経てー. ターミナルケア7: 471-476, 1997.